各地の
たより

倉敷通信
大阪支部

倉敷通信

望遠鏡の金具の冷たさが觸手に感ぜられなくなつた．宵に見るプレヤデスが薄い光の靄の黄道光の中で震るへてゐるのを見ると(毎年さうだが)，春がきたのをしみじみと感ずる．

陽春四月!! 陽氣に誘はれてか，ぽつぽつ天文臺を參觀に來る．三月は約二百五十名．自分の說明も大分板についてきたし，32 cm のカルヴ1赤道儀も，もう大體操作出來る樣になつた．この望遠鏡の眞價が自分の手で發揮されるのも餘り遠くないことゝ思はれるが今は，未だ時計仕掛の方に大分故障があり，且つ鏡の鍍銀も仕直されねばならない．

時計もスムースに動き，鍍銀も仕上げられ，其の上自分も充分この望遠鏡が使ひこなせる樣になつたら，——さて今年は火星がやつて來るのだが，——自分は遊星面の觀測に於ては全然素人であり，又觀測に最も困難といはれる火星であるから，今の處，何處まで觀測が仕得られるかは疑問であるが，この機會は逃さずに，あくまで忠實，精勵に見る積りである．

もう專門の觀測家達は今月頃からボツボツ觀測仕初めるのであらうが，自分も伊達幹事に指導して頂いて下旬頃から初める積りである．

專門の變光星の方は，木邊さんと相談の上大體の方針は決まつて，南天の星を主に見る樣になるであらうが，詳細は會見の上でと思つてゐる．

三月は何もしなかつた．生活が落ち付かぬ爲めと，天文臺內に市の青年道場といふ樣なものがあつて不便極まりなく，その上自分が今年初めから身體が本調子でなかつた事等で，ともかく怠け暮らして皆樣に實に恥かしい次第です．凡てが本調子になりましたら懸命に勵みますから何卒御寬恕下さい．

皆樣が一度御來訪あらん事を期して待つて居ります．(岡林滋樹)

大阪支部だより

⊠眼視變光星觀測論　銀河臨時增刊叢書第3輯として本會觀測部長木邊成麿氏及び故小山理學士の執筆せられた觀測部員の必讀書．

⊠支部報第52號(四月1日附)　130部發行，天界新知識の急報．

四月例會（8日）　夕刻より心齋橋筋をぐらやにて開會，山崎・山形兩氏の「東日プラネタリウム見學對話」，神戸の神田氏「倉敷天文臺を訪ねて」，織田氏「保土谷隕石の報告」，西森氏「太陽プロミネンスに就いて」，森先生「西南天文部の近況」，高城氏が新プラネタリウム解說者3名の紹介等あり，盛況裡に閉會，出席者19名.

銀河第3卷第3號　五月1日附發行，200部突破記念號として60頁.

表紙「火星・地球軌道圖」，口繪「故田中博士遺影」(アート寫眞版)，「火星見取圖」3枚(密着燒寫眞)，卷頭言「眼視變光星觀測論の刊行に際して」，「火星運河論」伊達，「ヨーロッパ天文臺行脚」(2) 田中博士遺稿，「觀測の生理學」江原醫學士，「四季の太陽」(1) 高木公三郎理學士，「保土谷隕石と横山隕石」，「暦」S. D. 生，「天文人語」，「觀天雜話」津留榮夫，「遺稿の後に」田中正治醫學博士，「湖畔の故田中博士」石原こう子，「憶田中博士」西森，「火星の大接近と協同觀測」，「五・六月の天象」，「編輯後記」，附錄 "Star-legends among the American Indians" (3).

〔213頁より續く〕

本古暦の教訓，暦の天文記事の見方と共に近藤芳一氏の力著である．緒論，第一篇干支の實體を語る，第二篇日時及び方位の吉凶の眞相を語る，第三篇定所の吉凶の眞相を語る，第四篇二十八宿及び七曜の實體を語る，第五篇六曜の實體を語る，第六篇九星の實體を語る，第七篇九曜星の實體を語る，第八篇現代民間暦の誤謬を摘示す，附表一干支表，納音表の內容を有し，暦の研究家は無論のこと，一般人士も心得て置くべきことが多い.

10. 詩經的星　本書は「科學ペン」五月號の野尻抱影氏の文を張我軍が漢譯されたものである．それに「文化」第五卷第五號所載，青木正兒氏の從西湖三塔說到雷峯塔（張我軍譯）とを合し，北京近代科學圖書館刊第五號の單行本とされたものである．詩經所載的星名とは參，昴，畢，定，織女，牽牛，箕，火，斗，伯和啓明(曉星)，長庚(宵星)等12星である．伯和啓明，長庚の何れも金星の事である.

附記　讀者諸君にお願ひ致すことがある．それは邦文天文書で新聞に廣告が出たものは購入して居るが，その他のもので前記以外のものを御承知の方は本誌に御投稿下さらば幸甚の到りである．遡つても然りである.